博士（人間科学）学位論文　概要書

A Study of Zen in American Poets

（禅とアメリカ詩人研究）

三芳康義　（Yasuyoshi Miyoshi）

2007 年 7 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

アメリカ文学の詩における禅仏教との出会いの起源は、ほとんどそれまでヨーロッパ一辺倒であった知識人たちの異国に対する興味、なかでも東洋の思想に向けられたのが 19 世紀の中葉になってのことであった。そしてその中心的人物こそ、ニューイングランドのコンコードに住み、人間は自然を通じて神の領域へと進むことができるという、一種の自然哲学を唱えた transcendentalist たちであった。特に哲学者であり、詩人でもあった Ralph Waldo Emerson（1803-82）と彼の哲学を実践した著述家で詩も書いた Henry David Thoreau (1817-62) である。

エマソンは「コンコードの賢人」と呼ばれていたが、その一方で『詩集』(*Poems* 1846) に代表される詩人としてのエマソンを再評価することは、アメリカの詩の歴史における禅の影響を語るうえで避けることはできない。また、それが新しい視点を見出すための出発点でもある。しかし、エマソンの詩に与えた影響が禅仏教であるというのは、もちろん、時期尚早であり、その前段階であるインドのヴェーダ思想を中心とした東洋思想と言うべきである。ただ、禅とアメリカ詩との関係を見るとき少なくとも言えることは、日本の禅思想が 1893 年にシカゴで開かれた世界宗教会議を経て、その後、およそ 50 年を過ぎて「禅ブーム」と呼ばれた 1950 年代に至るアメリカ詩の歴史的な流れを概観すると、エマソンの形而上詩とでも言える東洋的な特色をもつ詩から出発することに本論文の意義がある。そして、エマソンの transcendentalism の影響を受け、さらに彼の思想を具体的に日常の生活のなかで徹底的に実践したソローは、今日、エコロジストの先駆者として見直された「自由人」（Non-conformist）であり、彼の詩を東洋思想の視点から論じることが必要になる。つまり、ソローの代表作 *Walden, or, Life in the Woods* (1854) は、コンコード近郊のウォルデン湖畔に小屋を建て、2 年あまり自給自足の独居生活を送った記録であり、このエッセイと *The Dial* に掲載した詩篇には、神秘主義的汎神論とでも言えるヒンドゥー教や、特にヴェーダ思想への観念的な空想に近い、強い憧れを垣間見ることができるからである。従って、本論文の第 I 章においてエマソンとソローを論じたのは、ヒンドゥー教やヴェーダ思想を少なからず自分たちの思想のなかに取り込んだ先人としての評価をあらためて指摘するためである。また、エマソンの形而上学的な特徴をもった詩の精神は、意外にも Lindley Williams Hubbell (1901-94) という詩人において、20 世紀の現代絵画がいかに現実世界を捉えたかという美学的な観念論へと形を変えてつながってくる。これに対し、「実践」を第一とする現実と観念の入り交じったソローの詩的感覚は、その舞台をウォルデン湖畔から、Gary Snyder (1930-　) の住む北米大陸、北西部に広がる「曠野」（wilderness）に移して

再び復活するのである。

第Ⅱ章は、Gertrude Stein (1874-1946) とハベルとの出会いを論じながら、スタインの初期の代表作である *Three Lives* (1909) のなかの“Melanctha”における文体を分析する。特に、Paul Cézanne や Pablo Picasso の美学がスタイン特有文体と彼女の認識論に影響を及ぼしたことを指摘する。さらにそのスタインから大きな影響を受けた第Ⅲ章で扱うハベルの美学へといかにつながっているかを論じる。つまりハベルの詩の世界を知る上でスタインの文学を確認しておく必要がある。

第Ⅲ章では、1953 年に初めて日本にやって来た L. W. ハベルを取り上げる。彼が日本に来た最初の目的は、同志社大学でシェイクスピアを始め、英語の詩やギリシャ劇を講じるためであった。しかしハベルは、大学の教師という面だけではなく、実は来日する以前の 20 代の頃から詩作を始め、生涯にわたって詩を書き続けたという、極めて知的な詩人としての顔を持っていた。従って、詩人としてのハベルを中心にして、特に来日前後に書いた詩を論じる。その理由は、ハベルが日本に来る前、ニューヨークの市立図書館に勤務していたおよそ 20 年の間に培った現代美術への造詣の深さが東洋、特に日本の美的なものを感じ取るうえでいかに役に立ち、同時に彼の詩作にどのように反映していったかを突き止めるためだからである。なかでも、来日以前のアメリカと日本の名所や旧跡を訪れたときの印象を詩にした *Travel Diary 1953-1954* (2002) とハベルの美学が最もよく反映され、彼の代表作である *Seventy Poems* (1965) の詩を中心に取り上げる。さらに「美的審美眼」という、ハベル特有の美学が日本の古典といわれる舞台芸術で、特に禅の精神を受け継ぐ「能」と京都を中心とした「禅寺の石庭」がもたらす日本の美と出会ったとき、どのような反応を示したかを検証する。こうしたハベルの美学を探ることは、詩人ハベルについての最初の評価につながるはずである。

第Ⅳ章では、1956 年に初めて来日し、京都の臨済宗大徳寺で「雲水」として禅の修行を実際に行った Gary Snyder の初期の詩を特に論じる。スナイダーは、20 世紀のアメリカ詩の歴史において、1950 年代以降のいわゆる counterculture の流れの中で、単に Beat 詩人としての評価ではなく、10 年近く日本での禅の修行を実践した詩人であることと、その後 1990 年に出版した *The Practice of the Wild* というエッセイを読むと日本の曹洞宗の開祖である道元禅師 (1200-53) の禅思想の影響が大きいことがはっきり読み取れるのである。道元禅師のライフワークであった『正法眼蔵』の中の「山水経」をスナイダーは正面から取り上げ、自分自身の詩の世界に踏襲していたことが分かる。それはすでに初期の詩 *Riprap*

and Cold Mountain Poems (1959) の中にその萌芽を発見することができるのである。言い換えれば、道元禅師の「山水経」にある禅思想をスナイダーが受容できるだけの感性を持ち合わせていて、それによって初期の詩が出来上がっていたことを指摘することがこの第Ⅳ章の目的である。

インドにその起源をもつ仏教が中国において禅の色彩を加え、日本において特に日本臨済宗の祖である栄西禅師(1141-1215)が鎌倉時代二度入宋し、その栄西から刺激を受けた道元も 1223 年に入宋し、天童山景得徳禅寺の如浄禅師(1163-1228)の仏法を嗣いで 1227 年帰国した。そして 1244 年、越前の地に曹洞禅の専修道場である永平寺を開き、日本の禅仏教の基礎を築いた。こうした禅の歴史において、アメリカの詩と日本の禅とをつなぐ懸け橋として 20 世紀を生きたハベルと 21 世紀の初頭の今日においても活動を続けているスナイダーの詩を研究する価値がある。本論文によって、禅というものが宗教としての力だけでなく、思想・文化としてアメリカの詩人たちの間に影響を与え、彼らの血となり肉となっていることが分かるはずである。そして本論文のもう一つの重要な目的は、日本に帰化した碧眼の詩人ハベルの詩を研究することによって、彼が 1994 年 10 月 2 日京都の地で生涯を閉じたことの意味を探るその第一歩となることにある。